

# シャルル・ド・フコーの回心

Conversion de Charles de Foucauld

徳村 佑市

## はじめに

シャルル<sup>\*</sup>・ド・フコーは二〇世紀のはじめサハラ砂漠で原住民の宣教に従事し、キリストの愛の福音を身をもって生き、1916年12月1日、土民の反乱にまきこまれて命を落したフランスの聖者である。この小論では、その生誕から28才で回心するに至るまでの、彼の内面的歩みをたどり、その回心の動機、経過に照明をあててみたい。

フコーは、その回心から10年以上たった1897年に、ナザレトで心霊修業中、自分の過去をふりかえって、これを四つの時期に分類している。（『イエズスのシャルル、フコー神父の霊的著作集』<sup>フシフアン</sup> P.518）第一期は幼少年期とよばれ、15才までで、この15才のときに彼は信仰を失っている。第二期は15才から20才までで、彼はこの時期を思春期と呼んでいる。第三期は20才から回心が行なわれる28才までで、彼はこの時期を青年期と呼んでいる。成年期と呼ばれるのはそれ以後の時期である。そしてこのように時期を区分する尺度として、自分の家族、自分を育ててくれた祖父や、おばのマティスィエ夫人や、いとこのボンディ夫人にたいする愛情のあり方をあげている。とくにボンディ夫人は、フコーの回心において大きな役割を演ずるのであるから、家族にたいする愛情のあり方で、自分の人生を区分するやり方は、意味のないものではない。第一期では、家族にたいする愛情はたいへん強く、第二期では、それは衰えたといってもまだ強かった。しかし第三期では、それは消えはしなかったが、大いに衰えたと彼は言っている。その消えなかった愛情がよみがえり、回心で大きな働きをするのである。この区分のうち、第二期と第三期は連続している。第三期は第二期の結果

であり、第二期にまかれた種が、第三期に収穫されたと言ってもよからう。しかしこの二つの時期は、連続しているとは言えるものの、そこに現れる相の上では色合いがちがっている。第二期では、不可知論にとらわれて信仰を失い、信仰の喪失から、なげやりで怠惰な生活におちいるが、この時期の彼は行動的ではない。ところが第三期では、放蕩の局面であれ、南オラネーの戦役への従軍であれ、モロッコの探険であれ、行動的な面が現れており、しかもそこには神の呼び声を感じられるのであるから、この二つの時期を区分する方法は妥当であろうと思う。それ故この小論では、フコーの区分にしたがって、一期、二期、三期にわけそれに回心の前後を特別の項目としてつけ加えてシャルル・ド・フコーの回心に至るまでの内面的歩みをたどって行きたい。

## 第一期 幼少年期

シャルル＝ウジェーヌ・ド・フコーは1858年9月15日、ストラスブールで生れた。彼の家は、先祖の中に、フランスとキリストにたいする献身で秀でた者をもつ名家であった。父はフランソワ＝エドアールで、母はエリザベトという名であった。シャルルの前に、同じくシャルルと呼ばれる長子があったが、生れるとすぐ死んでしまった。妹のマリは1861年8月13日に生れた。シャルルが5才のとき、父は肺結核で倒れ、山林監督官の職を辞した。そして子供たちに病気をうつすのをおそれて、妻と別居し、妹のイネス（マテスィエ夫人）のところへ行った。母はこの別居に心を痛めながら、シャルルとマリをつれて、実父のモルレ大佐のところへ身をよせたが、1864年3月13日流産で死んでしまった。またシャルルの父も5ヶ月後の8月9日パリで死んだ。こうしてシャルルは、5

※ シャルルと表記するのが普通であるが、日本ではこれまで、「カトリック生活」その他が、シャルルと表記しているので、それにしたがった。しかしシャルルと表記する理由については、つまびらかではない。

才で孤児となったわけだが、彼は後年、父母の生きていた幼年期のことを、ノスタルジーをもって思い出している。父と教会へ行ったことや、母が幼いシャルルにおぼえさせた祈りの言葉など。母は信心深い人で、子供たちを連れて教会を訪れ、十字架の下に花束を置いたり、クリスマスにはまぐさおけをつくったり、聖母マリアの月である5月を祝ったり、シャルルの部屋に祭壇をかざったりした。彼はそれらのことを後年なつかしく思い出している。

孤児になったシャルルとマリは、ストラスブールに住む母方の祖父、モルレ大佐のところにひきとられるが、祖父は孫たちを溺愛する。とくにシャルルは死んだ母に似ていたので、モルレ大佐の溺愛の対象となった。

シャルルは第8学級（日本の小学校第4学年に相当）と第7学級（小学校最上級）を、ストラスブールのサン＝アルボガストの教区のコレージュで過ごしたが、この学校が閉鎖されたので、1868年9月、10才のとき、同じ町のリセの第6学級（中等教育の1年目に相当）に入る。このころの彼の性質については、リセの先生は「知的で勤勉な子供であったが、後にあらわれる熱烈で果敢な性質を示していなかった」（ジャン＝フランソワ・スティックス、『シャルル・ド・フコーの歩み』P・17）と言っているし、彼より8才年長で、彼の母親がわりとなり、彼の回心に大きな影響を及ぼしたいとこのマリ・マテスィエは、このころの彼について、「騒々しいところはなくて、どちらかといえば眠ったような子供であった」（同上、P・17）と言っている。また1871年5月ごろ、シャルルの家庭教師であった、ナンシーのコレージュ・サン＝テティエンヌの先生デルゾール師は、「シャルルは勉強に興味をもつ知的な子供であったが、大変やさしい性格で、男の子というより女の子のようであった」（同上、P・17）と言っている。両親を失ったシャルルは、内省的でさわがしさを好まず、感じやすく、傷つきやすい少年であった。

1867年5－6月を、エヴルーの近くのルーイのおばのイネスの屋敷で過ごす。このおばのイネスは、マテスィエ夫人のことで、美人のほまれが高

く、アングルも二度彼女の肖像をえがいている。

（ルネ・バザン、『シャルル・ド・フコー』P・63、注）1869年以降は、シャルルはそこで、8才年長のいとこのマリ・マテスィエと友情で結ばれることになる。このマリ・マテスィエは、前にもふれたが、彼のあやまちの年月をとおし、彼が宗教の道に入ったのちも、彼を見守ってくれた人で、シャルルの回心に影響をあたえることは後に見るであろう。

1870年、シャルルが12才のとき普仏戦争（1870－71）が起り、モルレ大佐は孫をつれて戦火をさけ避難する。そして戦火がおさまったとき、彼はフランス国籍をえらび、ナンシーに定住した。シャルルは1871年10月1日、この町のリセの第3学級（中等教育4年に相当）に、学校で昼食をとる半寄宿生として入学した。

1872年4月28日、彼は愛する家族に見守られ励まされて、初聖体をうける。マリ・マテスィエもパリから来てこれに立合い、彼にボスュエの『奥義への上昇』という書物をおくった。彼は28才で回心する前に、この書物を読みかえしている。そして同日堅信礼をさずけられた。

リセの第2学級へ入って、あらゆる書物を読むことを許されたが、いろんな読書をするにつれて信仰はぐらつきはじめる。それにリセの先生方もそれぞれ立派な人たちであったが、信仰については中立を守っていて、彼をこの点で導いてくれる人はいなかった。祖父は信仰をもっていたが、文学と考古学を愛する耽美主義者で、彼の助けとはならなかった。それに時代は実証主義の風潮にひたされていた。実証主義は無神論ではないが、神が存在することも、存在しないことも、証明できないとする立場である。こうした時代風潮を呼吸したシャルルは、信仰についての導き手もないままに、不可知論におちいり、信仰を喪失しはじめたのである。後に彼はアンリ・ド・カストリへの手紙で、「12年間全く信仰なしに暮した」（アンリ・ド・カストリへの手紙、1901年8月14日）と言っており、同日つけのいとこのマリへの手紙で「13年間、神にたいする信仰を全くもたなかったことを思い出して下さい」（ボンディ夫人への手紙、1901年8月14日）と言っているから、彼が信

仰を失いはじめたのは1873年か1874年のころ、リセの最高学級である修辞学級に在学中のこととしてよからう。

## 第二期 思春期

信仰からの分離は、一気になされたのではなく徐々になされたのである。いろいろな書物を読むことを許された彼は、モンテーニュやヴォルテールなどの懐疑主義の巨匠に親しみ、徐々に自分が抱いていた信仰の基礎に疑いをもちはじめる。この修辞学級の学生時代の心象風景をかえりみて、彼は後になって次のように言う、「十分に証明されているように見えるものは何もなかった。同じ信仰をもって、人々がさまざまな宗教にしたがっているのを見るだけで、すべてが疑わしかった。」（アンリ・ド・カストリへの手紙、1901年8月14日）また同じ手紙の中で、「肯定しがたい1＝3を説く子供時代の（宗教）は、何にもまして認めがたく思われた。」（同上）同じ手紙の中で次のようにも言っている、「哲学者たちの意見はみなくいちがっている。私は12年間何も否認せず、何も信ぜずに暮した。真理に絶望し、神を信じさえしなかった。いかなる証拠も十分明白には見えなかった。」（同上）このように、信仰についての導き手もないまま読書にふけたこと、それに時代の実証主義の風潮に影響されたことから、子供時代の信仰に疑いをいだき、そこから離れて行くようになるのである。人間の理性の力では神を知ることができない、という不可知論のとりことなり、すべての思想に相対的な価値しかみとめられないような状態におちいるのである。しかし彼はそのために無神論者になったのではない。彼はカトリックの教や、宗教者に対する尊敬を、心のどこかに失わずに持っていたが、多くの哲学がそれぞれ異なった意見を表明しているのを見たり、同じような信仰心をいだいて、人がいろいろちがった宗教に向うのを見て、子供時代の信仰の基礎を揺がされ、疑いに沈んで行ったのである。

1874年4月11日、彼が第二の母とみなしていたマリ・マテスィエが、結婚してボンディ夫人となったことは、このような精神状態にあった彼に打撃をあたえ、彼をいっそうひとりぼっちにした。

1874年8月12日、年令に達しないのに特別認可をえて、ナンシー大学の文学部で、バカロレアの第一部に合格する。そして幼いときから望んでいた軍人への道をすすもうとする。祖父のモルレ大佐は、理工科大学の出身であったので、孫がそちらの方へ進学することを望んだが、シャルルは試験が楽だからとの理由で、サン＝シール陸軍士官学校へ進もうとする。そして10月に、専門大学の準備教育をする、パリのポスト街にあるイエズズ会経営のサント＝ジュヌヴィエーヴに入るが、ここは、規律がきびしいので、シャルルはそれに嫌気がさし、ほとんど勉強しなかった。それでも1875年8月のはじめ、バカロレアの第二部にも合格した。成績は第一部の時と同様「可」であった。

1875年10月、サント＝ジュヌヴィエーヴの2年目に入り、シャルルは17才になったばかりである。このころのことを回想して、彼は次のように言っている。「私はポスト街での2年目に入っていた。このように嘆わしい精神状態にあったことはかつてなかったと思う。他の時期にはもっとひどいことをしたことがある。しかしなにがしかの善が、その時には悪から私をおしのけた。17才のときには、私はエゴイズムそのもの、不信心そのもの、悪へのねがいそのものであった。私は狂ったようになっていた。」（ボンディ夫人への手紙、1892年4月17日）シャルルの場合には、最初に道徳的あやまちがあり、それが信仰の喪失へとつながったのではない。彼の場合には、最初に信仰についての疑いがあり、それが信仰の喪失をよび、信仰の喪失が道徳的無政府状態へとみちびいたのである。「信仰の最後の火花が消えたとき、私はどうか暮していた。」（アンリ・ド・カストリへの手紙、1901年8月14日）そして彼はエゴイズムのとりこになり、それがノーマルな状態だと思いこんでいた。彼が信仰を喪失したことによって、道徳的無政府状態におちいったからといって、一気に悪におもむいたのではない。第二期のこの段階では、まだそれほど行動的となっていない。信仰を喪失し、道徳的規準を見失った彼は、人生にたいする意欲を失って、怠惰な生活に沈んで行くだけである。時々思い出したように祖父に40ページからなる手紙を書いて、ナンシーへ帰ることを求

めたりするが、一般に行動的などころはなく、内省的で怠惰な生活に沈んでいた。

1876年3月、サント＝ジュヌヴィエーヴを退学になる。学校側は祖父への配慮から、そうした形式はとらなかったが、実質的には退学であった。

ここでシャルは奮起して、名誉にかけてもサン＝シール士官学校に入ろうと思い、祖父のつけてくれた家庭教師のもとで、ナンシーで勉強した。6月には士官学校の筆記試験をうけ、412人の合格者のうち82番で入学を許可された。彼は10月27日ナンシーを去り、30日に入学する。18才になったばかりである。

サン＝シール士官学校では、1870年の普仏戦争の敗北の仕返しをしようとして、若い学生の間には臥薪嘗胆の気風がみなぎっていた。彼の同期生の中には、後年有名となるドリアン、サラユ、ペタンなどが居り、野心と栄光を求めて皆がきそいあっていた。その中でシャルは、ただ肥満しているためにのみ有名で、衣服の支給のとき、身体に合う服がなかったほどであった。ここでも彼はサント＝ジュヌヴィエーヴの継続のような生活をおくり、人生や仕事に意欲を示さず、余暇の時間には、ギリシャやラテンの作家の書物を手にぶらついたりして、孤独を求めている。彼の人生にたいする無関心、意欲の喪失は服装その他にあらわれ、だらしない服装のために罰をうけたりしている。それでも1年目の終りには、391人中の143番で、一級の記章をうけ、同級生80人の騎兵の中に加えられた。

1878年2月1日、祖父危篤のためナンシーへ呼ばれる。祖父は2月3日に死亡した。こうしてシャルを墮落からひきとめていた愛情のきずなが一つ切れたことになる。祖父はシャルを愛していたので、そのきずながシャルを墮落からひきとめていたのである。この愛情のきずなを失ってシャルはまず一種の麻痺状態におちいる。全く意気沮喪し、人生や仕事への関心を失ってしまう。この時期に彼が罰せられた理由を見ると「不注意」「整理箱や寝台のみだれ」「だらしない服装」「汚れたズボン」「長すぎる髪」などであって不服従のためではない。サン＝シール滞在中に45回罰をうけ、その上47日の禁足を科せられて

いるが、それらはすべて意欲の喪失、それからくるだらしなさを示しているのである。4月1日、彼は一級の記章を失い、8月19日、386人中333番で卒業する。8月20日にはサン＝シールを去って、妹のいるルーイへ行き、9月15日、20才の誕生日をむかえる。そして遺産を手に入れて、一気に放蕩生活におもむくのである。

### 第三期 青年期

10月1日フコーは少尉に任命される。10月末ルーイを去ってナンシーへ行き、妹のマリとともに友人のところまで2週間すごす。11月15日<sup>\*</sup>、ソミュールの騎兵学校に入る。ここで彼の生活は一変しすべての束縛をぬぎすてて、人生を楽しもうとしているように見える。後年モレス侯爵となるアントワヌ・ド・ヴァロンプロザと同室であったがそこで出す上等の夕食のため有名となる。たくさんの友人を招き、賭に大金を投じたりする。カフェでは1ルイ金貨で支払いをし、ガルソンから釣銭をうけとらなかつたり、特価品には目もくれず上等のものばかりさがして身につけている。したがってソミュールでは、サン＝シールとはちがって、服装の点では良い点をつけられるが、ここでは罰の対象は不服従の方へ移る。ソミュールでは21日の軽謹慎と、45日の重謹慎の罰をうけている。ドニーズとロベール・バラはこのソミュールの出来事として、フコーがある日ルンペンの服装をして脱走し、メヌ・エ・ロワール県の農家を乞食をして歩き、数日後憲兵にとらえられたという話を伝えている。（ドニーズとロベール・バラ、『シャル・ド・フコーとフラテルニテ』P. 26）ジョルジュ・ゴレは『フコー神父の足跡をたどって』の中で、フコーがソミュールでうけた罰の表をあげている。その中でフコーは1879年9月9日づけで21日間の重謹慎を命ぜられており、その理由は「違法に駐屯地をあとにしたために科せられた2週間の罰（重謹慎）がとけると、変装して許可なく兵舎をぬけ出した」となっているので、

\* ジョルジュ・ゴレは10月31日としている（『フコー神父の足跡をたどって』P. 23）

この話が事実だとすれば、この重謹慎をうけたときのことであろう。ドニーズとロベール・バラはこの出来事は将来のフコーを暗示するものだとしている。フコーのこのような生活ぶりを心配して、おばのマテスィエ夫人やいとこのボンディ夫人が手紙を書くが、あまり効果はなかったようである。1879年の10月の閲兵のときに、ソミュールの騎兵学校の副長は「軍人にふさわしくない。十分義務の感情をもたない」と手帳にしるしている。ソミュールの卒業試験では87人中87番であった。ソミュールを出ると第四軽兵連隊に配属され、マルヌ県のセザンヌという村に駐屯するが、そこは人口2,000人くらいの村で退屈し、配置がえを願ってポン＝タ＝ムッソンへ移され、そこで1880年をすごした。

上官たちは、彼を若すぎる、決意と情熱に欠け、優柔な性格で、任務を果すことができないと判断する。彼はポン＝タ＝ムッソンでも、ソミュールの生活をさらに大規模にして、お祭りさわぎをくりかえす。町の人々は、その奇行とスキャンダルに耳目をそばだてるが、彼は一向に行いをあらためない。彼の年収は現在の金で数百万フランであったが、それを湯水のようにつかい、夜会やレセプションをくりかえす。パリから着く列車から、夜の女たちがおりてくるのが見られたことであろう。フコーはこの時期にミミと呼ばれる、才気はあるが尻軽な女と関係をもった。彼女は高等淫売であった。こうしてお祭りさわぎをつづけていたのだが、その当時のフコーの心には何が起っていたのであろうか。彼は後に次のように書いている「あなた（神）は苦しい空白、その時以外には経験しなかったような悲しみを、私に感じさせた…その悲しみは、部屋で一人になると、毎晩もどってきた…それは、いわゆるお祭りさわぎの間、私を黙らせ、おしつぶした。お祭りさわぎを組織したのは私であるが、時がくると、私は沈黙、嫌悪、無限の倦怠のなかでそれをすごした…あなたは良心のやましきからくる、漠然とした不安を私にあたえた。良心は眠っていたけれども、全く死んではいなかったのである。私はその時以外には、この悲しみ、この不快、この不安を感じたことはなかった。神よ、だからそれはあなたの贈物であ

った……私はそれを思っても見なかったのであるが……あなたはなんと親切なのだろう。」

（『シャルル・ド・フコーの霊的著作集』P. 76）  
外面的には陽気にはなやかにお祭りさわぎをくりかえしていたが、内面的にはこのような悲しみ、苦悩が深化していたのである。ソミュールでの派手な生活が倍加されるにつけて、その内面の苦悩も倍加されたのであろう。ソミュールで兵営を脱走して、メヌ・エ・ロワール県で乞食をさせて歩かせたものが、その歓楽が盛になればなるほど、彼の心の中にますます強く意識されてくるのであった。彼は後になって、「だからそれはあなたの贈物であった」と言っている。彼が神より遠ざかれば遠ざかるほど、神の呼び声も、彼の中で強くなりまざったのであろう。彼はそれを自覚していなかったのであるが。

1880年、彼の22才の年は、お祭りさわぎであけくれる。その年の12月、彼の属していた第四軽騎兵連隊がアフリカ第四獵騎兵連隊となり、セティフに駐屯することになる。彼はそこへミミを同行し、彼女はフコー子爵夫人を名のって、アフリカの地をふむ。フコーはその関係をかくすどころか、大いに吹聴し、ポン＝タ＝ムッソンと同じ生活をつづけた。上官たちは忠告、いさめ、命令をくりかえしたが、フコーはききいれようとしなかった。ついに不身持と不服従のかどで休職となる。彼が上官の言葉に耳をかさなかったのは、ミミを愛していたからではない。独立不覇で自尊心の強い彼は、人から自分の生活に干渉されることを嫌ったからである。そこで彼は1881年3月20日、ミミをつれてフランスに帰り、エヴィアンに身をおちつける。

こうしてエヴィアンでミミと暮っていた5月のある日、南オラネーでの土民の反乱のニュースが彼のもとに届く。そしてもと彼が属していた第四獵騎兵連隊が戦闘に入ったことを知る。フコーは彼の性格の特徴である、過去ときっぱりと手を切る強い意力をもって行動をはじめた。彼はパリの陸軍省におもむき、騎兵隊にもどしてほしいと要請する。そのためにはすべての条件をうけ入れ、一騎兵として隊列に加わってもよいと言う。6月3日指揮権をかえしてもらい、アフリカに渡り、

南オラネーの連隊に合流する。

フコーの伝記を書いたルネ・バザンは、このフコーの行動をもって、彼の回心のはじまりだとしている。フコーはフランスのために、自己を犠牲にする行動に出たのだから、人間の自己犠牲を喜ばれる神にそれだけ近づいたのだと言っている。

(ルネ・バザン、『シャル・ド・フコー』P. 10) 一方ジャン＝フランソワ・スティックスは、このフコーの行為をもって、回心のはじまりだとすることはできないという立場をとっている。そしてそれは全く人間的な、自然な面での回心であって、神の手が加わっていないと言っている。フコーがそれまで送っていた放蕩生活をたちきって、このような行動に出たのは、力の意志のあらわれであって、空虚を満し、すべてを知り、自己を大きくしたい欲求のあらわれであったとスティックスは見ている。(ジャン＝フランソワ・スティックス『シャル・ド・フコーの歩み』P. 32) すでに見たように、彼はソミュールやポン＝タ＝ムッソンの放蕩生活の中で、自分ではどうにもならない悲しみや苦悩を感じていた。彼はその時、それを自覚してはいなかったのだが、後になって「神よ、だからそれはあなたの贈物であった」と言っている。同様にこのアフリカの遠征やモロッコの探険にふれ、神の手が常に自分の上にあったのに自分はそれをほとんど感じていなかった、とするところがあるから(『シャル・ド・フコーの霊的著作集』P. 77)、このようなフコーの行動の上に、神の手が加わっていたと見てよいのではないだろうか。もっともフコーはどこでも、この遠征への参加が回心のはじめだとしるじていないのであるから、直接的には回心のはじまりだと見なすことはできないかもしれない。そしてその行動は、フコーにとっては、放蕩生活に決別し、行動の中に自己を忘れ、自己を大きくしようとする性質のものだと意識されていたかもしれないが、この遠征を通じてアフリカやアラビア人にふれ、そのアフリカの呼び声にひかれてモロッコを探険し、そこで神が絶対である人々の生活にふれ、神への回帰の道を歩むのであるから、このアフリカへの遠征に参加したことには、やはり神の手が加わっていたと見なければならぬ。そしてそれは

上述の意味で、間接的な回心のはじまりと言ってもよいのである。もっとも彼自身にはそれは自覚されていなかったらしく、セティブでフコーと一緒に暮したアマード將軍の証言によれば、フコーはある日愛馬を死なせ、その埋葬の時に次のように言ったとのことである。「お前は良い馬であった。すぐれた馬であった。お前はまっすぐに天国へ行く馬の仲間にも属している。私はそれを残念に思う。なぜなら、我々は二度と会えないだろうから。」(ジャン＝フランソワ・スティックス、『シャル・ド・フコーの生涯』P. 17)

それはともかく、戦場での彼は危険に身を挺し、窮乏にたえ、立派な兵士であり指揮官であることを立証した。危険に身をさらし、兵士たちに心をくばったので、兵士たちから愛され、メキシコ戦役に参加した老兵たちから賞讃されたと言われる。ソミュールやポン＝タ＝ムッソンの名残りと言え、彼がまだ手放していなかったアリストファネスの本であり、気に入りの葉巻が手に入らない日は、煙草を吸わないといった気位の高さであった。またこの従軍が、彼の家族、とくにおばのマテスィエ夫人の、彼にたいする評価をかえさせたこともつけ加えておこう。彼女は、フコーが卑劣で意力がないと見ていたのであった。そしてフコーもそのことを気にしていたのであった。

南オラネーの遠征は8ヶ月つづき、その後彼はマスカラの駐屯地へやられる。しかしこの遠征中に彼が経験した、南の砂漠の神秘的な広大な空間とアラビア人の生活が彼の心をとらえるようになる。彼は未知の世界に目を開かれ、アラビア人を研究しようと思う。

南オラネーの戦役が終ると、フコーは東方を旅行するという理由で休暇を願うが、拒まれたため1882年1月28日マスカラから辞表を出している。この辞表は3月10日づけで受理されたので、フコーはアルジェに居を定め、アラビア語を勉強し、モロッコの探険の準備をする。彼は博物館の管理者マッ＝カルティのもとで、旅行に必要な勉強をする。

軍隊をやめるといふ知らせが届くと、彼を見直していたおばのマテスィエ夫人はいたく失望する。そしてまた放蕩の生活に逆もどりすることを

おそれて、親戚のラトゥーシュを後見人として彼につける。フコーは4年たたないうちに、彼がうけついだ財産のうち11万フラン以上を使っていたのである。

ラトゥーシュはフコーをナンシーに呼びよせ、フコーは後見人の課する条件をうけいれて、モロッコへの探険を認めてもらう。放蕩生活では月に4,000フラン以上を浪費していたのに、後見人の条件をいれて、月350フランで貧しい学生のような生活をし、その中からアラビア語のレッスンの費用もまかなった。それでラトゥーシュはフコーのモロッコ探険を認めたのである。

モロッコの探険は、ヨーロッパ人の入ったことのない土地の探険で、もし身分が露見すれば殺されるかもしれない危険な旅であった。ジャン＝フランソワ・スティックスは、フコーがこの旅行を計画したのは、自分にたいし、また他人にたいして自分を大きくしたいという渴望からであったとべている。(ジャン＝フランソワ・スティックス、『シャール・ド・フコーの歩み』P. 35) そのためには集团的企てである戦闘よりも、個人のイニシアティブで行なわれる、危険な未知の土地の探険の方がよりふさわしく思われたのであろう。それに自分に後見人をつけたマテスィエ夫人にたいして、自分にも立派な仕事ができることを証明したかったのであろう。しかしすでに見たように、フコーは南オラネーの戦役に参加して、アフリカの広大な空間に目を開かれ、アラビア人の生活に魅力を感じはじめていた。そしてモロッコの探険を通じて、神がすべてである人々の生活にふれ、自分が見失っていた絶対的なものをかいまみるのであるから、彼のこの行動にも神の手が加わっていたと見るべきであらう。もっとも彼自身は、偉大になりたいというはげしい欲望にとらえられていて、このことは自覚していなかったかもしれないが。

彼は1883年6月10日<sup>\*</sup>、ユダヤ人のラビ・マルドシュを道案内として、アルジュを出発する。彼自身

もユダヤ人になりすまし、ラビ・ジョゼフ・アルマンと名のり、ロシア生れで、最近の迫害で追放されてイエルザレムに来、そこにしばらくとどまった後に、義捐金をあつめるために北アフリカに来て、旅をしているとのふれこみであった。旅の途中8月23日に、心配している妹に手紙を送り、「道のりを最後まで歩んだのち、できるだけ早く戻る」(ブリック夫人への手紙、1883年8月23日)という。この「最後まで」という言葉は、モロッコの探険においても、以後の信仰生活においても、彼の性格を特徴づける鍵となる言葉であらう。また妹に次のようにも書いている。「何事かをすると言って出発した以上、それを果さずには戻るべきではない。」(ジャン＝フランソワ・スティックス、『シャール・ド・フコーの歩み』P. 37)そして一年がかりでモロッコを調査して帰り、友人のフィッツ＝ジャーム侯爵に次のように言う、「それはつらかったが、大変面白かった。そして私は成功した。」(同上、P. 37)そして彼はこの探険の功績により、1885年4月フランス地理学会の金メダルを得ている。

彼はこの旅行を通じて、回教世界の偉大さに目をひられる。それは彼らのもつ友愛と真のもてなしによるものであった。彼らがフコーの素性にうすうす感づいていた時でも、彼を助け、もてなすことを怠らなかった。こうした友愛ともてなしは、フコーに回教世界の偉大さについて目を開かせたが、それ以上に彼の心をうったのは、回教を信じて生活する人々の偉大さと単純さであった。そこでは神がすべてであり、コーランは人々の生活に意味と目的を与えるものであった。そして回教の世界とのこの接触は、彼のうちに眠っていたものを揺り動かし、絶対的な存在をかいまみさせることになる。彼は後にアンリ・ド・カストリに手紙を書いて次のように言っている。「そう、あなたの言うとおりのだ。回教は私の中に深い動揺をひき起した。この信仰を見、たえず神の前で生き

※ ジャン＝フランソワ・スティックスはこの出発を6月30日としているが、(『シャール・ド・フコーの歩み』『シャール・ド・フコーの生涯』)これは誤りであらう。ルネ・バザン(『シャール・ド・フコー』)とジョルジュ・ゴレ(『フコー神父の足跡をたどつて』)は6月10日としている。

ているこの人々に接して、世間的なわずらいよりももっと偉大で、もっと真実な何かを私はかいまみたのだ。」（アンリ・ド・カストリへの手紙、1901年7月8日）また別の手紙で、「回教は大変魅惑的だ。それは大変私を魅惑した」（同上、1901年7月15日）と言い、また「回教は教義も組織もモラルも単純なので、大変気に入った」（同上1901年8月14日）と言っている。そしてこの魅力は単にロマンチックなものではなく、全く宗教的な性質のものであった。このように回教にひかれるが、彼はその限界をも見抜いている。「回教には神的基礎がなく、そこには真理はないことを私ははっきりと見た。」（同上、1901年8月14日）なぜなら「愛の基本は愛するもののなかに消え沈み、他のすべてを虚無とみなすことである。回教は、神にふさわしい神への愛を説くに十分なほど被造物にたいする軽蔑をもたない。純潔さと貧しさがなければ、愛は大へん不完全である。なぜなら情熱をこめて愛するとき、一分間にすぎなくても、愛の対象から気をそらせることができるすべてのものと人は縁を切り、愛の対象の中に全面的に身を投げ、消え失せるからである。」（同上、1901年7月15日）

またこの旅では、彼はユダヤ人になりすまし、ユダヤ人のガイドをつれて行ったのであるが、仲間のユダヤ人たちのもてなしがどのようなものであるかを、身をもって知った。探険の終る数日前フコーはユダヤ人なら決してしないこと、髭を洗った。同室のユダヤ人たちの驚きは大変なものであったが、彼らはみな裏切らないことを約束し、歓待の義務にそむかなかつた。ヨーロッパ人であるという身元がわかれば、殺されたかもしれない旅の出来事であった。フコーはまた迫害の幾世紀をへてユダヤ人が固く守っているその宗教にも感銘をうけた。もっとも彼はその宗教の限界をすぐ見抜いたのであるが。

このように、この旅行から思わぬ感銘をうけたのであるが、1884年5月26日、一年にわたるモロッコの探険からアルジェに帰った彼は、そこで以前と同じような悪、放蕩生活におちいる。神は彼を呼び、彼の上に手を置いていたが、彼はそれを悟ることから程遠かった。回教世界の偉大さにふれ

ても、それが直接自分の生活の糧とならず、自分の生きる道を見出しかねていたので、容易に以前の悪に逆もどりすることができたのである。モロッコから帰って、6月7日までアルジェですごしたのち、6月17日パリへ帰り、必要な訪問をすませると、マテスィエ夫人の夏の住居であるジロンド県のル・テュケのシャートへ行き、そこでボンディ夫人と再会している。彼が後にボンディ夫人に出した手紙によれば、「あなたはル・テュケで大変親切であったので、私は10年このかた忘れていた善を再び見つけ、尊敬しはじめた。それ故それにつづく年は以前ほど悪くはなかった。」（ボンディ夫人への手紙、1889年9月20日）このル・テュケでの6週間は重要である。彼は南オラネーの戦役とモロッコの探険のはげしい活動の後、孤独と静寂を求めている。それは彼の生活にはじめて訪れた反省の時期でもある。彼は緑と水にかこまれた田園の中で、愛する家族にかこまれて生活する。そしてこの愛する人々にかこまれた田園生活の中で、甘美な孤独を味わい、その静かな生活の反省の中で、忘れていた善の感覚をとりもどして行くのである。南オラネーの戦役への参加が間接的な回心のはじまりだとすれば、このル・テュケでの静かな生活は、直接的回心のはじまりとしてもよいのではないだろうか。

8月にアルザスを旅行し、9月にランド地方で予備役将校として軍務に服した後、10月末にアフリカへ帰っている。これはモロッコ探険のノートを完成するためと、他の旅行の準備をするためである。アルジェでは、地理にくわしいティトル少佐と知り合い、未来の旅行について助言をうる。その娘のティトル嬢が気に入ったので、彼女と結婚しようとする。彼女は23才で、プロテスタントからカトリックに改宗したばかりである。彼女の目から見ると、フコーは完全な自制心を持ち、45才の人のように見えたという。若すぎると批判されたソミュール時代からみると、格段の相違である。その当時のフコーの信仰がどのようなであったかを知る資料として、フコーはある日ティトル嬢に、次のように語ったという記録がある。「私たちが結婚したら、宗教に関しては、あなたに完全な自由をみとめよう。だが私はおつとめには行かない。信仰を持たないから。」（ジャン＝フラン



ソワ・スティックス、『シャル・ド・フコーの歩み』P. 40)しかしこの結婚話はうまくいかなかった。家族の者、とくにボンディ夫人が反対したからである。この反対の理由については、ルネ・バザンは不明だとしているし(ルネ・バザン、『シャル・ド・フコー』P. 61), ジャン＝フランソワ＝スティックスは、ボンディ夫人があまりにも性急な行為だとして反対したのだと言っているが(ジャン＝フランソワ・スティックス、『シャル・ド・フコーの歩み』P. 40), くわしい事情はわからない。しかし後にフコーはボンディ夫人への手紙で「私はこの結婚から救われる必要があった。そしてあなたは私を救った」(ボンディ夫人への手紙, 1889年9月20日)と言っている。また別のところで、「私が救いを見出すよう定められていた, この家族の胸の中に帰るのをさまたげ, いつかあなた(神)にすべてをささげるのをさまたげたかもしれない, すべての良いきづなを, あなたはほどいて下さった」(『シャル・ド・フコーの霊的著作集』P. 77)と言っているが, この「良いきづな」が結婚のことをさしているとするれば, この結婚は, 後日キリストに全身全霊をあげて仕えるのを妨げたであろうし, 彼がボンディ夫人に「救ってくれた」と言っているのは, 彼の将来への進路からはずれることを救ってくれたという意味であって, 実際にはボンディ夫人や家族の者が, どのような理由で反対したのかは不明である。彼はそれを「すべての良いきづな」と言っているのであって, 彼には悪いものと思われていなかったのであるが, 家族の反対の結果, このきづなを結ぶことから解放され, 自分の進むべき道からそれなかったという理由で, 「救ってくれた」と言っているのであろう。同様に彼は「あなた(神)は私をあなたからひきはなしたかもしれない, すべての悪い関係を知らないうちにほどいて下さった」(『シャル・ド・フコーの霊的著作集』P. 77)と言っている。これはアルジェの滞在中で結んだいくつかの悪い関係が, ル・テュケに滞在していたとき破棄されたことを意味するものである。この良いきづなが解かれてゆくにも, 悪い関係がたたれてゆくにも, ボンディ夫人の強い影響が見られるのである。

2ヶ月ほどアルジェに滞在して仕事をした後, 12月末フコーはフランスへ帰り, 妹のマリとレイモン・ド・ブリックとの結婚に立ち合う。1885年3月, フコーは旅行の報告を完成するため, 再びアルジェにおもむく。4月24日ボンディ夫人の夫が, いとこの名代として, 地理学会でフェルディナン・ド・レセップスの手から金メダルを受ける。5月フコーは疲れを感じてフランスへ帰り, しばらくとどまる。

9月14日フコーはアルジェへ向けてポール・ヴァンドルを船出する。7月末にはモロッコ旅行の報告書はほぼ出来あがっていたのであるが, それを出版する前に念のため, アルジェリア, テュニジアの南部を西から東に横断して, モロッコ領サハラと比較しておきたいと思ったのである。

1886年1月パリに帰り, 1月28日ニースの妹のところへ行く。マリは前年の10月7日長子を生んでいた。2月19日ニースを去ってパリへ行き, ミロメニール街50番地のアパルトマンに落ちついて仕事をはじめ。そこではアラビア風の生活をし, 外套を着て絨毯の上に寝, 袖なし服で仕事をしていた。このアパルトマンはサン＝トーギュスタン教会から200メートルのところであり, マテスィエ夫人とボンディ夫人の住む館のあるアンジュウ街からも近かった。彼はここで仕事にはげみ神が彼に救いを見出させるマテスィエ夫人の家族とつきあうほかは, 人に知られず, 孤独の中で生活していた。このころの精神状態については, 彼は次のように書いている。「私の心や精神はあなた(神)から遠かったが, 私は前ほどよごれていない空気の中で暮していた。それは光明でも善でもなかった。しかしそれはもう以前ほど深い泥沼でもなく, 以前ほどいとわしい悪でもなかった… 障害物は徐々にとりのぞかれていた… 大洪水の水はまだ地をおおっていたが, 少しずつ少なくなっていた。そして雨はもう降ってはいなかった…… あなたは障害物をこわし, 魂を柔順にし, いばらややぶを燃しながら地をととのえていた。」(『シャル・ド・フコーの霊的著作集』PP. 77—78) 1884年ル・テュケで目ざめはじめた善の感覚が, ここでは確実に地保を獲得している。彼は純潔にひかれはじめている。「ことの成行きで, あ

なた（神）は私を純潔にした。そしてやがて1886年の冬の終り（すなわち同年2月）に、あなたが私をパリの家族の中につれもどしたとき、純潔さは心地よいもの、心の求めるものとなった。」

（同上、P. 78）また「それは私の魂を真理に準備するのに必要であった。悪魔は純潔ではない魂を支配しているので、真理はそこへ入ることはできない。」（同上、P. 78）この純潔さへのあこがれは、ミロメニール街の近くのアンジュウ街に住むマテスィエ夫人やボンディ夫人などの一家の影響でさらに強められる。マテスィエ夫人は、前にも述べた通りアングルに二度肖像をえがかれたほどの美女で、夫の甥で、30才で大臣になったルイ・ビュッフエの政治的サロンをきりまわしていた。彼女はフコーと和解していた。探険家としての彼の名声が、それを助けたことは言うまでもないが、もともと彼女は彼に強い愛情をもっていたのである。「家族の人たちに、あなた（神）は放蕩息子のように私を迎えるようにさせた。その放蕩息子に、彼が父の家を捨てたことを感じさせさえしなかったのである。あなたは家族の人たちに、私が過ちをおかさなかったら、期待できたであろうような厚意を私にたいしていただかせた……私はこの愛する家族にだんだん親しんで行った。私はそこで徳の雰囲気の中で暮したので、私の生命は目に見えてもどってきた。それは冬がすぎ去って、大地に生命をあたえる春であった。このやさしい太陽に照されて、善への願い、悪への嫌悪、あやまちに再びおちることができないという気持、徳を求める心が生じたのである。あなたは私の心から悪を追い出した。私の良い天使は再び戻ってきて、あなたはそれに地の天使を結びつけたのである。」（『シャル・ド・フコーの靈的著作集』P. 80）この「地の天使」というのはボンディ夫人のことをさすのは明かで、彼女はフコーの回心において大きな働きをするのである。

1886年の春には、彼はまだ全く人間的な面にとどまっていた。彼は道徳主義の方へひかれる。彼は徳にひかれているが、それは全く異教的なものであった。彼は異教の哲学者の書物を読むが、失望を見出すだけである。彼はいとこのボンディ夫人が初聖体のときにくれたボスユエの『奥義への

上昇』を読み、キリスト教が真実なのではないかと思ったりする。しかし彼はこの書物の中にストイックな苦行精神のかてを見ていただけであった。彼はまだ純粹に人間的な道徳的な面にとどまっていたのである。彼自身も言う通り、人間には真理を知ることができるとは思っていなかったのである。

フコーはすでにボンディ夫人の徳によって、徳の方にひかれていた。しかし今度は彼女の魂の美しさによって真理の方にひかれるようになる。

「この魂は大変知的なので、それが固く信じている宗教は、私が考えるように狂気ではありえないだろう。」（『シャル・ド・フコーの靈的著作集』P. 81）彼はこの知的で徳徳で、あつくキリスト教を信じているこの女人を前にして、この人が信じている宗教が、ばかげたものではないかとは自問せざるを得ない。この点でボンディ夫人は、フコーの回心において神が使った第一の道具であると言えよう。我々が見たように、フコーを回心に導いた間接的動機はいろいろある。南オラネーの戦役への参加もそうであったし、モロッコの旅行で超越的神をかいまみたまったのもそれであろう。しかしフコーの心を直接キリスト教にみちびいたのは、このボンディ夫人の徳とやさしさであったと言えよう。彼は次のように言っている、「神はあなたを、私にたいする慈愛をあらわす第一の道具としたので、その慈悲が流れだしたのはあなたからです。もしあなたが私を回心させ、イエズスにつれもどし、敬虔で良いことを、言葉を追って少しずつ教えなかったならば、私は今日どうなっていたでしょう。」（ボンディ夫人への手紙、1901年4月15日）彼はまたその頃のことを思い出して次のように言う、「それはみなあなたのなされたことであった、神よ、あなた一人のなされたことであった……美しい魂があなたを助けていた。しかし沈黙とやさしさと厚意と完全さでそうしたのである。彼女は自分が何であるかを示していた。彼女は善良で魅惑的な香りを漂わせていた。しかし彼女は動かなかった。」（『シャル・ド・フコーの靈的著作集』P. 81）ボンディ夫人はキリスト教について、言葉で説教したりしなかった。彼女は黙ってフコーのそば

におり、彼を見守るだけであったが、この有徳で美しい魂の持主、しかも大変知的な人が、キリスト教を固く信じているという事実そのものが、彼の心にキリスト教は真理なのかもしれないという思いを起させたのである。愛情をもってこの悩める心をやさしく見守ること、それは百千の説教にまさる説教であった。彼女はこの方法を、自分の指導者ユヴラン師から受けついでいたのであった。1838年に生れたユヴラン師は、1875年以来マテスィエ家の教区であるサン＝トーギュスタンの教区の助任司祭であった。マリ・ド・ボンディは1876年のある日偶然告解所に入り、ユヴラン師が深い洞察力の持主であることを知り、自分の指導者にえらぶとともに、家族のものにもひきあわせた。こうして彼はマテスィエ家の相談役となったのであるが、彼の信条は、人を回心させようとするときには、言葉で説教すべきではない、忍耐よくその人を愛していることを示すべきであるという信条であった。マリ・ド・ボンディはこの方法をユヴラン師から受けつぎ、フコーも後にサハラ砂漠で原住民に接するとき、この方法を採用するのである。

回心が迫っていた時、フコーは自分の仕事の最後の仕上げをするためにチュニジアに旅行する。9月15日チュニスにつき、10月13日頃パリに帰っている。彼は「意外な出来事」によってパリへの帰りを急いだと言っているが（『シャルル・ド・フコーの霊的著作集』P. 80）、これが何をさすかは不明である。彼はそのころの心の状態を次のように言っている、「これほどの恩寵をうけた後にも、私の魂はまだあなた（神）を知らなかったあなたはたえずその中で、その上で働いていた。あなたは至高の力とおどろくべき早さでそれをかえた。それなのに私の魂はあなたを全く知らなかった……1886年10月のはじめ、家族の中で6ヶ月暮した後、私は徳にあこがれ、それを望んでいたが、あなたを知ってはいなかった。」（同上、P. 79—80）

### ダマスコの道

10月の間彼は心に飢のようなものを感じ、あちこちの教会を訪れて奇妙な祈りをくりかえす、「神

よ、あなたがいらっしゃるのなら、おっしゃって下さい。」（『シャルル・ド・フコーの霊的著作集』P. 81）このときから神は知るべき真理ではなく、出会うべきある人となっている。彼はその出会うべきある人を予感しているのだが、まだ明白につかんではいなかった。彼はカトリックについて教えてくれる良い先生をさがし、その人から講義をうけようとする。マテスィエ家の相談役であるユヴラン師が、サン＝トーギュスタン教会のクリプトで、例年開いている宗教講話のことを聞き、それに出席したいと思ってボンディ夫人にたずねると、ユヴラン師は身体の調子が悪くて、その年は講話を開いていないとボンディ夫人は残念がっていた。

10月29日か30日の朝、フコーはサン＝トーギュスタンの教会に入り、カトリックについての話を聞こうとして、ユヴラン師をさがす。フコーがその時以前にユヴラン師を知っていたかどうかについては、研究者の意見のわかれるところで、断定を下しがたい。ジョルジュ・ゴレは、この年すなわち1886年の2月に、マテスィエ夫人のところで、フコーはユヴラン師に出会ったとしているし（ジョルジュ・ゴレ、『フコー神父の足跡をたどって』P. 59）、ルネ・バザンも、回心前に二人は会ったことがあるとしている。（ルネ・バザン、『シャルル・ド・フコー』P. 66）ユヴラン師はマテスィエ家の精神的相談役で、マテスィエ家へ出入りしていたから、そこでフコーに出会っていたことは大いにありそうなことである。しかしカトリックについての教えをもとめて、サン＝トーギュスタン教会に入ったこの日のことを語って、フコーはユヴラン師のことを「私の知らない坊さん」（アンリ・ド・カストリへの手紙、1901年8月14日）と言っている。それはともかくカトリックの教えをききにフコーが教会に入ったとき、ユヴラン師はいつものように告解所にいる。自分には信仰はないが、カトリックの教を学びたいと思ってきたとフコーが言うと、ユヴラン師はその場でフコーをひざまずかせ、告解させ、その後ただちに聖母マリアの祭壇へ聖体を拝領しにやった。このユヴラン師のやり方には驚くべきものがある。信仰を求めていたかもしれぬが、信仰を持つこと

ができず、ただカトリックの教をききにきた人  
に、彼は即座に告解させ、聖体を拝領させたので  
ある。彼はおそらく前から、フコーの精神状態につ  
いて、ボンディ夫人から話を聞いていたのかもしれ  
ない。彼はまた教会で、フコーが何時間もひざま  
づいて祈っているのを見かけていたのであろう。  
そうでなくてもユヴラン師は人間の心の洞察にひ  
いでた人であった。彼はフコーを見たとき、フコ  
ーが長年おちいつていた相対主義の最後の壁を破  
ることができず、あがいているのを見てとったの  
であらう。そして最良の方法は、彼の意志に働き  
かけることであるのを見てとったのであろう。

ともかくフコーにとっては、これは決定的な回  
心であった。全体的な無条件な回心であった。ダ  
マスコの道で、天からの光に照されて、イエズ  
スの声を聞いて、決定的に回心した使徒パウロの場  
合ほど劇的ではないが、フコーはこの機会に決定的  
に変わったのである。ユヴラン師がフコーにたい  
してとった方法はまことに意味深い。学生時代に  
実証主義の風潮におかされて不可知論におちいり  
人間の理性の力では神を認識することができない  
と考えていた彼、一年ほど前に子供時代の友人ガ  
ブリエル・トゥルドに、「決定的なという言葉  
をどう理解すべきか君は知っている。我々はおたが  
いにも哲学者なので、この世に決定的な  
何かがあると信ずることはできない」（ガブリエ  
ル・トゥルドへの手紙、1885年11月18日）と言  
っていた彼に、ユヴラン師がその場でひざまづかせ  
告解させた行為は、その急激さによって、フコー  
に絶対的、超越的の神を認識させたことであらう。

フコーが陥っていた相対主義の壁を破ったのは  
このユヴラン師がとった行為の急激さである。ま  
たその場で告解させた行為は、別の面でも意義深  
い。学生時代に信仰を失い、そこから道徳的退廃  
におちいっていた彼は、それまでに数々の罪をお  
かしていた。その罪がこの告解によって一挙に許  
されたのである。彼は次のように言っている。  
「神よ、あなたはすべての良いものを下さいま  
した。くいあらためる罪人を見て天に喜びがある  
のなら、私が告解所へ入ったとき、それがあつた。  
（『シャルル・ド・フコーの靈的著作集』P.82）  
フコーは告解の急激さによって相対主義の壁

を破られ、絶対的、超越的の神に接すると同時に、  
この告解で罪を許されたことによって、イエズ  
スの愛に接したのである。フコーは「神よ、あなた  
はすべての良いものを下さいました」と言ってい  
るのが、この「すべての良いもの」の内には、相  
対主義の壁を破って、絶対的なもの、決定的な  
ものにふれ得た感謝を示すとともに、彼がおかした  
数々の罪を許すイエズスの愛に接した喜びをも語  
っていることを見落してはなるまい。さらにユヴ  
ラン師にこのような行為をとらせたこと、フコー  
にそれをうけ入れる準備がととのっていたこと  
の中には、聖霊の働きを見ないわけにはゆかない。  
フコーはこの日聖霊の働きにうながされて、父  
である神と、子である神イエズスを離すことので  
きない一体として経験したのである。10月29日か30  
日、三位一体の神の啓示を彼はうけとったので  
ある。これがフコーの回心の内容である。

愛されることが大きければ大きいほど、人はす  
べてを捧げてその愛にむくいようとする。フコー  
は回心のとき「すべての良いもの」を受けた。彼  
は罪を許され、イエズスの大きな愛をうけた。彼  
は以後すべてをささげて、その愛にむくいよう  
とする。彼は次のように言っている。「神があるこ  
とを信ずるやいなや、神のためにのみ生きる以外  
に、なすすべのないことを私は理解した。」（ア  
ンリ・ド・カストリへの手紙、1901年8月14日）  
この決定的回心以後、フコーは神に身を捧げよう  
とする。そしてその時以後、のちにサハラ砂漠で  
住民にたいして愛の福音を実行し、途中で土民の  
反乱にまきこまれて命を落すまで、この方向は一  
貫して変わらないのである。

## 参 考 書

著作名に日本訳をつけたものは、文中で引用した。

Ecrits spirituels de Charles de Foucauld

(シャルル・ド・フコーの靈的著作集)

Oeuvres spirituelles de Charles de Jesus, père de  
Foucauld(イエズスのシャルル、フコー神父の靈的著作集)

Lettres à Henry de Castries

(アンリ・ド・カストリへの手紙)

Lettres et carnets

Rene Bazin: Charles de Foucauld, Hermit and Ex-  
plorer (シャルル・ド・フコー)

Georges Gorree: Sur les Traces du Père de Foucauld  
(フコー神父の足跡をたどつて)

Jean-François Six : Itineraire spirituel de Charles de Foucauld  
(シャルル・ド・フコーの歩み)

Jean-François Six: Vie de Charles de Foucauld  
(シャルル・ド・フコーの生涯)

Jean-François Six: Charles de Foucauld aujourd'hui  
Denise et Robert Barrat: Charles de Foucauld et  
la Fraternite (シャルル・ド・フコーとフラテルニ  
テ)

Pierre Lyautey: Charles de Foucauld

